

献詞

遠藤邦基先生は、平成二十年一月二日にめでたく古稀をお迎えになったが、それに伴って、定年延長期間満了により、三月三十一日をもって関西大学を退職されることとなった。

先生は、昭和四十三年三月に京都大学大学院文学研究科博士課程（国語学国文学専攻）を単位取得退学された後、光華女子大学、岐阜大学、奈良女子大学を経て、平成八年四月に関西大学文学部に教授として着任され、以後十二年間にわたって、教育と研究の両面に活躍された。

先生のご研究は、日本語の音韻と表記の問題を中心に、きわめて広い範囲に及んでおり、そのご業績は、その方面の第一人者にふさわしく、質量ともにきわめて豊かである。その一部は、『国語表現と音韻現象』『読み癖注記の国語史研究』というご著作にまとめられ、他の論文とともに後進に多大な恩恵を与え続けている。

先生の学問研究に対する真摯な姿勢は、縁あって同僚として、後輩として、また教え子として先生に接したものがすべてが実感するところだが、そればかりでなく、先生は教育者として、国語学の教育に対しても常に若々しい情熱を持たれ、その内容豊かで優しさときびしさを併せ持った講義は、多くの学生たちを魅了してきた。受講を契機に先生の学問の魅力に惹かれる学生も多く、そこからまた、数多くの若い研究者が育っていった。

そのように周囲に集まる人々を、先生はいつも豊かな包容力で迎えられ、にこやかな応対の中で適切な助言や指導を与えられた。先生の個人研究室からは、いつもそのような学生や大学院生たちのにぎやかな談笑の声が聞こえることが多かった。

そのような先生が大学を退かれるのは、我々にとってあまりにも大きい痛手であり、残念の思いを禁じ得ないが、勤

務の多忙から解放されて、先生の国語学研究はさらに自在の進展を見せ、後進にますます大きな模範を示されるに違いない。

先生の、今後ますますのご健康とご活躍をお祈りして、ここに、関西大学国文学会より『國文学』遠藤邦基教授古稀記念号を献呈する次第である。

遠藤邦基教授 略年譜

昭和十三（一九三八）年

一月二日 京都市にて生まれる

昭和三三（一九五八）年

四月一日 大阪市立大学文学部入学

昭和三七（一九六二）年

三月三十一日 大阪市立大学文学部国語国文学科卒業

四月一日 京都大学大学院文学研究科国語学国文学専

攻修士課程入学

昭和三八（一九六三）年

四月一日 国立国語研究所地方言語研究員・京都府の

調査の一部を担当（昭和四二年三月まで）

昭和四〇（一九六五）年

三月三十一日 京都大学大学院文学研究科国語学国文学専

攻修士課程修了

四月一日

京都大学大学院文学研究科国語学国文学専
攻博士課程進学

昭和四二（一九六七）年

四月一日 毛利菊枝演劇研究所（劇団くるみ座）講師

（昭和五七年三月まで）

昭和四三（一九六八）年

三月三十一日 京都大学大学院文学研究科国語学国文学専

攻博士課程単位修得退学

四月一日 光華女子大学文学部専任講師

昭和四五（一九七〇）年

三月三十一日 光華女子大学文学部専任講師退職

四月一日 岐阜大学教育学部専任講師

昭和四六（一九七二）年

一〇月一日 岐阜大学教育学部助教授

昭和五一（一九七六）年

四月一日 奈良女子大学文学部助教（配置換）

昭和五二（一九七七）年

岐阜女子大学（非常勤講師・集中）

京都教育大学（非常勤講師・集中 平成四

年及び同六年）

昭和五三（一九七八）年

四月一日 大阪市立大学文学部（非常勤講師）

昭和五四（一九七九）年

四月一日 京都大学文学部（兼文学研究科非常勤講師

・昭和五六年三月まで）

昭和六一（一九八六）年

四月一日 奈良女子大学文学部教授（人間文化研究科

博士課程兼任）

立命館大学大学院文学研究科（非常勤講

師・平成八年三月までの隔年）

昭和六三（一九八八）年

愛媛大学法文学部（非常勤講師・集中）

平成三（一九九二）年

四月一日 関西大学大学院文学研究科（非常勤講師・

平成八年三月まで）

五月二三日 京都大学文学博士（博文―二二九号）

平成四（一九九二）年

四月一日 関西学院大学大学院文学研究科（非常勤講

師・平成八年三月まで）

同志社大学大学院文学研究科（非常勤講

師・平成九年三月まで、及び、同十四年四

月から現在に至る）

平成五（一九九三）年

四月一日 京都大学大学院文学研究科（非常勤講師・

平成七年三月まで、及び、同九年四月から

一〇年三月まで、同十一年四月から十二年

三月まで／ともに文学部兼任）

平成八（一九九六）年

三月三十一日 奈良女子大学教授退職

四月一日 関西大学文学部教授

平成九（一九九七）年

三月十九日 奈良女子大学名誉教授（奈良女子大学―六

六号）

平成十一（一九九九）年

四月一日 京都府立大学大学院文学研究科（非常勤講

師・平成十二年三月まで）

平成十二（二〇〇〇）年

一〇月一日 大阪大学大学院文学研究科（非常勤講師・

平成十三年三月まで）

平成十三（二〇〇一）年

四月一日 京都女子大学大学院文学研究科（非常勤講

師・現在に至る）

平成十八（二〇〇六）年

六月六日 財団法人新村出記念財団理事

平成二〇（二〇〇八）年

三月三十一日 関西大学教授退職（予定）

所属学会

日本語学会（評議員） 萬葉学会 訓点語学会 表現学会

遠藤邦基教授 著述目録抄 (除 研究発表・講演)

伊勢物語総索引 (岩波文庫本)

昭和三六年八月 私家版 (油印版)

慶長三年耶蘇會板落葉集 (索引を安田章・山添晶子氏と共同作成)

昭和三七年七月 京都大學國文學会

隣語大方 (翻字・索引を安田章氏と共同作成)

昭和三九年九月 京都大學國文學会

交隣須知 (索引を松井利彦氏と共同作成)

昭和四一年四月 京都大學國文學会

連濁語のゆれ

昭和四一年五月 『國語國文(京都大學國文學会)』 三三五卷五号

日本語語地図 (全六巻・京都府の調査の一部を担当)

昭和四一〜四九年 国立国語研究所

類推—マ行音とバ行音の交替を中心に—

昭和四三年一〇月 『光華女子大学研究紀要』 六集

全国实例方言集「京都府京都市」

昭和四四年七月 『國文學解釋と鑑賞』 三四卷八号

外来語アクセントの性格

昭和四四年十一月 『光華女子大学研究紀要』 七集

年齢別にみる共通語化の現象—京都方言をめぐる—

昭和四五年三月 『國語學(国語学会)』 八〇集

共通語化の過程

昭和四五年十一月 『講座正しい日本語』 七 明治書院

幼児・児童の共通語意識—その特異性を中心に—

昭和四六年一月 『岐阜大学教育学部研究報告(人文)』 十九号

キリシタン資料の表記面からみた二面性—濁音の前の鼻音表記から—

昭和四六年二月 『岐阜大学国語国文学』 七号

語頭音の性格—トフ・トル・トク・ソフの特殊仮名遣混乱から—

昭和四十六年七月『國語國文』四〇巻七号

表記の混乱はどこから生じるか—オ・ヲ混—資料への疑問—

昭和四十六年八月『王朝(王朝文学協会)』第四冊

音韻資料としての掛け詞—ハ行音とその周辺を中心に—

昭和四十七年五月『王朝』第五冊

仮名遣を異にする掛け詞—「四つがな」の世界—

昭和四十七年六月『國語國文』四一巻六号

連母音「〇」表記の一解釈—「深草」の掛け詞から—

昭和四十七年十一月『谷山茂教授退職記念国語国文学論集』塙書房

房

日本国語大辞典(全二〇巻)「副詞(擬声擬態語の一部)を執筆担当」

昭和四十七年十二月—五一年三月—小学館

回帰と類推—マ行の濁音仮名とその背景—

昭和四十八年二月『岐阜大学教育学部研究報告(人文)』二二一号

「国語の変遷」

昭和四十八年四月『古典文法要覧』中央図書

「書評」井之口有一・堀井令以知著『京都語位相の調査研究』

昭和四十八年六月『國語學』九三集

去声点と濁音—院政期の濁音の性格を知る手がかりとして—

昭和四十九年三月『國語國文』四三巻三号

古代語の音節構造の性格—ゼロ表記の意味を中心に—

昭和四十九年三月『岐阜大学国語国文学』一〇号

類音と連想—古代の地名譚を中心に—

昭和四十九年五月『王朝—遠藤嘉基博士古稀記念論叢』

類音としてみたる清・濁の関係—掛け詞を手がかりにして—

昭和四十九年九月『王朝』第七冊

促音表記固定の背景—なぜ「ツ」が用いられるようになったか—

昭和五〇年二月『岐阜大学国語国文学』十一号

上代の語頭濁音—「打出」の訓みを中心に—

昭和五一年三月『岐阜大学教育学部研究報告(人文)』二二四号

古代語の連母音—音節構造の立場から—

昭和五一年六月『王朝』第九冊

濁音減価意識—語頭の清濁を異にする二重語を対象に—

昭和五二年四月『國語國文』四六巻四号

中世末期のパ行音—その成立の背景—

昭和五三年六月『論集日本文学・日本語中世編』角川書店

古代東国語の音節構造—中央語との比較から—

昭和五三年四月『叙説(奈良女子大学)』二二号

『萬葉集八代集歌末語索引』(秋本守英・渡辺輝道氏ら七名と共編)

昭和五十四年七月 洛文社

連声発生の要因

昭和五四年一〇月『叙説』三号

「読み癖」注記に対する一解釈―ハ行転呼音に関して―

昭和五五年一〇月『叙説』五号

非連濁の法則の消長とその意味―濁子音と鼻音との関係から―

昭和五六年三月『國語國文』五〇卷二号

『古今訓点抄』の濁音―「読み癖」の解釈を通して―

昭和五七年三月『奈良女子大学文学部研究年報』二五号

カカ(母)の出自は幼児語か―諸説への疑問―

昭和五七年五月『国語語彙史の研究』三 和泉書院

平仮名の機能の歴史

昭和五七年五月『講座日本語学』六 明治書院

『古今訓点抄』の声点―その機能について―

昭和五七年一〇月『叙説』七号

京都府の方言

昭和五七年五月『講座方言学』七 国書刊行会

語誌「しおる」「だれる」

昭和五八年四月『講座日本語の語彙』一〇 明治書院

『源氏清濁・岷江御聞書』(京都大学国語国文資料叢書三七)

昭和五八年四月 臨川書店

川口一郎のせりふ

昭和五八年五月 劇団くるみ座 第四七回小さい劇場

語誌「ほれる」

昭和五八年六月『講座日本語の語彙』十一 明治書院

「篆隸萬象名義」(中古辞書一・著名辞書の解説)

昭和五八年九月『日本語学』第二卷九号 明治書院

「新撰字鏡」(中古辞書二・著名辞書の解説)

昭和五八年一〇月『日本語学』第二卷一〇号

「倭名類聚抄」(中古辞書三・著名辞書の解説)

昭和五八年十一月『日本語学』第二卷十一号

「箋注倭名類聚抄」(中古辞書四・著名辞書の解説)

昭和五八年十二月『日本語学』第二卷十二号

「日本地理志料」(中古辞書五・著名辞書の解説)

昭和五九年一月『日本語学』第三卷一号

バ行・マ行の「よみくせ」―発音から仮名づかいの問題へ―

昭和五九年三月『同志社国文学』二四号

「本草和名」(中古辞書六・著名辞書の解説)

昭和五九年二月『日本語学』第三卷二号

「よみくせ」と連濁―『源氏清濁』の疊語を中心に―

昭和五九年五月『国語語彙史の研究』五 和泉書院

賀茂雷神社三手文庫蔵落窪物語(翻字・校異等を加え安田章・小松光

三・神尾暢子氏ら八名と共編)

昭和五九年六月 塚原教授華甲記念刊行会 新典社

近世初期の物語の「読み癖」―当代的「よみ」の注記を対象に―

昭和五九年一〇月『叙説』九号

だいじにしたいお国ことば

昭和六〇年二月『新しい方言研究』 至文堂

旺文社詳解国語辞典(山口明穂・秋本守英編/副詞の一部を執筆担当)

昭和六〇年十一月 旺文社

連声の増価意識―誤った類推形の成立をめぐって―

昭和六〇年七月『國語國文』五四卷七号

北野天満宮関係文書にみる宛字―その有意性をさぐる―

昭和六一年三月『叙説』十二号

平安時代の和歌とハ行転呼音―「泡」を「あは」と表記することの意味

昭和六一年一〇月『叙説』十三号

振漢字による一種のアクセント表示法―江戸初期堂上系聞書を中心
に―

昭和六二年七月『國語國文』五六卷七号

真名伊勢物語の清濁表記―違例といわれるものの解釈―

昭和六三年三月『表現研究(表現学会)』四七号

誤った回帰―「私」を「はらは」と書くこと―

昭和六三年三月『奈良女子大学大学院人間文化研究科年報』三号

「声の表情」(項目担当)

昭和六三年五月『日本語百科大事典』 大修館書店

みとモビトモ聞こえぬやうに読む―中間的読みの注記とその意味―

昭和六三年一〇月『叙説』十五号

真名伊勢物語の表記―ハ・ワ行に関する仮名遣の違例といわれるものについて―

平成元年三月『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』 桜楓社

『国語表現と音韻現象』(著書)

平成元年七月 新典社

「そほづ」と「僧都」・「欲し」と「法師」―仮名遣を異にする掛詞―

平成二年一〇月『叙説』十七号

表記と発音の「ずれ」―応答語「あつ」の場合―

平成二年一〇月『学習研究』三二七号

『中院本古今聞書』の振漢字―その示すアクセントの性格について―

平成四年三月『奈良女子大学大学院人間文化研究科年報』七号

遠藤嘉基年譜及び著述目録

平成四年九月『國語學』一七〇集

近世初期の才段合長音と非長音―語彙による「ゆれ」の要因―

平成四年十二月『叙説』十九号

仮名ノママ読ム―聞書に於ける「読む」の注記―

平成六年十二月『國語國文』六三卷十二号

聞キヨキヤウニ読ム―「読癖」に於ける音感の問題―

平成六年十二月『叙説』二二号

源氏の講釈と読み癖

平成七年三月『新日本古典文学大系』月報五九号 岩波書店

「しぎのはねがき」と「しぢのはしがき」―古今和歌集の異文成立

に関する一解釈―

平成七年十二月『王朝』第一〇冊(塚原先生追悼号)

「故実読」「読癖」

平成八年一月『漢字百科大事典(項目担当)』 明治書院

「うめ」から「むめ」へ―「梅」の表記法の変遷の語るもの―

平成八年三月『奈良女子大学大学院人間文化研究科年報』十一号

『倭名鈔』飲食部の語彙の位相―漢字文献と和文献との比較から―

平成八年四月『国語語彙史の研究』十五(不破浩子と共著)

和泉書院

古今和歌集古写本の異文―規範的表記意識の影響を通して―

平成八年五月『國語國文』六五卷五号

禁忌詞と読癖―「世人(よひと)」の改読の方法―

平成八年一〇月『国語語彙史の研究』十六集 和泉書院

句読法の史的考察―「句ヲ切ル」注記の意味―

平成八年十二月『關西大學文學論集』四六卷第三号

下官集から仮名文字遣へ―「馬・梅・宜」はなぜ仮名遣の対象となった

か―

平成九年三月『叙説』二四号

音便の読癖―表記を改変せずに読み方を変えること―

平成九年三月『國文學(關西大學)』七五号

国語史資料としての呪文―天正狂言本の「くわつちほほ」の場合―

平成九年十二月『關西大學文學論集』四七卷第二号

連声の表現効果―促音型連声はなぜ少ないか―

平成一〇年三月『國文學』七七号

「陽気な女達」の文体

平成一〇年十一月 劇団くるみ座 第五九回小さい劇場

促音・入声音の「ンツ(ンチ)」表記―二字で表記することの意味―

平成一〇年十二月『國語國文』六七卷十二号

「青紙」から「平地」へ―ハ行頭子音の唇音退化を証する資料として―

平成十一年三月『國文學』七八号

定家仮名づかいの世界―「つひに」を「つゐに」と書くこと―

平成十一年六月『大阪市立大学文学部創立五十周年記念国語国文学論集』 和泉書院

牛の角文字―「い」説への疑問―

平成十一年一〇月『關西大學文學論集』四九卷一号

定家の表記意識―「なほ」を「猶」と書くことの意味―

平成十一年十二月『井手至先生古稀記念論文集国語国文学藻』

和泉書院

清濁の読癖―濁音専用仮名字体の存在しないこととの関係から―

平成十二年二月『文学史研究(大阪市立大学)』四〇号

助詞「へ」を忌避すること―拗音に対する音感との関係から―

平成十二年三月『國文學』八〇号

四十八字からなる「いろは歌」―仮名もじつかいの崩壊と仮名へんの卓立―

の卓立―

平成十二年一〇月『國語國文』六九卷一〇号

日本国語大辞典(改訂版)「語頭の清濁を異にする語(関係)の語誌を担当」

平成十二年十一月『日本国語大辞典』小学館

四つ仮名の読癖―「鼻二入ル」の注記の意味―

平成十三年三月『國文學』八二号

特殊音節(撥音・促音・長音)の表記法―「はねる・つまる・引く」とい

う説明が必要となったことの意味―

平成十三年三月『關西大學文學論集』五〇卷三号

「あめつち」「五十音図」など項目担当

平成十三年三月『日本語文法大辞典』 明治書院

才段長音の開合と読癖―ミセケチの背後にあるもの―

平成十四年一月『日本語学と言語学』 明治書院

杖つきの「乃」の字―言語遊戯としての見立ての文字―

平成十四年一月『國文學』八三・八四合併号

鶴の鳴声―鳴声と「死」の連想―

平成十四年三月『關西大學文學論集』五一卷四号

『読み癖注記の国語史研究』(著書)

平成十四年一〇月 清文堂

「笑えない喜劇」

平成十四年十一月 劇団くるみ座 第六六回小さい劇場

川のほとりに牛は見えけり―類形字体の識別と誤認―

平成十五年二月『國文學』八六号

禁忌語―表記の変更を伴わない諱の回避法―

平成十五年七月『關西大學文學論集』五三卷一号

字体分析の言語遊戯―漢字の合字・分字を中心に―

平成十五年十一月『国語文字史の研究』七 和泉書院

木へんに春の花見―字謎句の流行と漢字教育―

平成十六年二月『國文學』八八号

平仮名資料としてみた類聚古集―ミセケチ訂正を通して―

平成十六年七月『萬葉(萬葉学会)』一八九号

「古辞書・国語学と平安文学」

平成十六年七月『平安文学研究ハンドブック』和泉書院

助詞の「お」表記―十二世紀の平仮名写本を中心に―

平成十七年三月『國語國文』七四卷三号

西本願寺本三十六人集の表記―資料編―

平成十七年七月『關西大學文學論集』五五卷一号

表記の戯れ―元永本古今集を読む―

平成十七年十二月『シリーズ和歌をひらく』二卷 岩波書店

項目解説(魏志倭人伝・木簡など)―項目)

平成十八年一月『資料と解説日本文章表現史』和泉書院

西本願寺本三十六人集の転呼音表記―十二世紀初期の非古典仮名づ

かい―

平成十八年一月『國文學』九〇号

西本願寺本三十六人集の仮名表記の異例―「四つ仮名」「開合」など

を中心に―

平成十八年四月『国語文字史の研究』九

「契沖の狂歌」

平成十八年五月『泰山木』(新村出財団設立二五周年記念文集)

元永本古今集・伝公任本古今集の表記―資料編―

平成十八年七月『關西大學文學論集』五六卷一号

助詞「は」の「わ」表記―いろは歌の影響を通して―

平成十九年三月『國文學』九一号

平安時代写の絵巻物詞書の表記―資料編―

平成十九年七月『關西大學文學論集』五七卷一号

「ちぢみえ」―仮名の異名というは歌―

平成十九年十一月(予定)『国語文字史の研究』一〇

仮名遺書と読み癖―仮名遺書に於ける「ト読み」の意味―

平成二十年三月(予定)『國文學』九二号

(狩野理津子 作成)